

棚田家文書とその整理について

深井 甚三

棚田家は戦前の特に大正以降の伏木の有力な企業家であった。江戸期より明治期にかけて廻船業に関わって、大正7年(1918)に北海木材会社、翌年に北海商行と改名した会社の経営に携わったことで、大きく発展した家であった。

棚田家が現在居住する伏木錦町の家屋は国の登録有形文化財となっている、高岡のしかも伏木地区の歴史的にみて貴重な歴史的建築物である。この建物が建設されたのは明治23年の伏木大火後であり、伏木古国府の近世以来の代表的な廻船問屋塩屋茂兵衛家から分家し、船荷問屋などを経営した塩田幸助家(正和勝之助『越中伏木湊と海商百家』桂書房・1995年、520頁)が建て直したものである。富商の再建した建築物のため、数寄屋作りでつくられ、味噌蔵・衣装蔵・道具蔵に茶室なども備えた、廻船問屋の建物であった。この塩田が屋敷・家屋も売却して、伏木の新興企業家である棚田家が居抜きで屋敷と家屋を購入したと伝えられている。つまり、同家は塩田家の再建当時のまま引き継がれ、しかもそれは塩田家が所持していた、掛け軸その他の美術品も含んだのであった。もちろん、文書となれば、塩田家独自の重要性があるため、これはやはり継承されていない。しかしながら、明治前期における伏木の海商の文化遺産が、棚田家により受け継がれ、今日に伝えられたことは大変に意義深いことである。なお、先年、蔵に泥棒が入り、重要な美術品が盗まれたという。盗難以前の美術品などの目録は、この屋敷・建物の売却の年とみられる大正15年に作成されたものがあるが、盗難後に改めて市の文化財課により美術品の整理と目録作成が行われている。

高岡市が世界文化遺産に認定を受ける運動を行い、その後、平成23年(2011)に高岡市がいわゆる歴史都市に認定されるに際して、当然に棚田家の屋敷は伏木地区の貴重な歴史資源として重要視された。しかもここは重要文化財に指定されている浄土真宗の勝興寺や元船宿の秋元家であった北前船資料館からも近く、またJR伏木駅からもわずかな距離のために、伏木地区の観光資源としての整備も期待されているところである。歴史都市認定以前に同家の災害による破損箇所修復に加えて、前記のように同家の所有する美術品の整理などは高岡市により行われていたが、同認定後における棚田家の歴史資産整備のために今回、同家の文書整理が緊急調査として実施されたのである。もちろん、この調査実施に当たっては、御当主の積極的な対応があったためであることは忘れられない点である。

御当主は、大学進学後に東京のマスコミ関係の会社に勤められていたが、退社してから再び伏木に戻り、同家の屋敷と家屋の保存・維持などを図るために、住宅の主屋・味噌蔵・衣装蔵・道具蔵につき登録有形文化財の認定を受けられた。また、同家の家屋の一般公開や茶室の一般利用への解放など、地域の歴史遺産として活用してもらうことにも努められ、今日にいたっている。

棚田家のご当主が戸籍その他により調べられ提供された家系資料によると、江戸から明治期の当主は長助を名乗る人物であり、その後継者も長助を名乗った。明治37年(1904)に婿養子の竹次郎が当主となり、棚田家を大きく発展させたが、彼は戦後の昭和21年(1946)に亡くなっている。竹次郎の長男長造は明治21年生まれで、父とともに家業の

経営発展に尽くした人であった。

棚田家は江戸期に北前船の船頭を勤めていたとされているが、明治33年の『伏木港船荷問屋組合報告・第壹号』の「伏木港問屋・荷扱業者一覧表」に棚田長助が船荷扱い業者として登場する（正和勝之助『越中伏木湊と海商百家』307頁）。同家の経営と戦前における展開の概略は、中西聡氏が『海の豪商の資本主義』（名古屋大学出版会・2009年）にて、御当主が蔵から出された主要な文書を検討され、紹介されている。棚田家は守山（高岡市）の橘家と砺波の佐藤家とともに、北海木材会社、改名した北海商行を経営したことで、大きく経営を発展させている。橘家は現在の伏木海陸運送の経営者で、当時は汽船経営や北陸人造肥料などの設立に関わった家で、佐藤家は佐藤建設前身の土木事業家の佐藤家である。北海木材会社の社長は橘林太郎が務め、棚田家は当主長造が常務取締役となり、佐藤家は監査役を務めたが、その実質の経営は棚田長造が行っていたという。その後佐藤家、さらに後に橘家が北海商行の経営から手を引き、棚田家は同社を基盤にして、家業の多角的な経営を伏木で展開し、また樺太に山林を所持するほか、地元にも宅地などを多数所持することになり、伏木の有力な企業家となった。

さて、今回の緊急文書調査は、ご当主の希望により高岡市から依頼されたので、数多くの文書目録を作られている今村郁子さんと高岡市の古文書教室講師などを勤められている山崎明代さんに依頼することになった。このほか高岡市の関係者から高岡市美術館学芸員の仁ヶ竹亮介氏と高岡市立博物館の藤井恵里氏も加わることになり、平成24年4月より始まることになった。市の文化財課では同年度で整理が終わると見込まれたが、棚田家文書は冊子の文書は多くないものの、葉書などが多数あるので、これを丁寧に整理・分類すると翌年までかかると判断していたが、深井が病気で整理に加われなくなり、また美術館・博物館の方々も業務を抱えていたために、実際には今村・山崎両氏へ負担がのしかかったものの、幸いにも両氏が奮闘され、しかも丁寧に整理して下さったおかげで、これらの葉書類なども含めてかなり詳しい整理が行われ、なんとか平成25年の内に整理を終えることができた。

この整理に当たっては、近代文書でもあり、近年公文書館・文書館関係者が主張される現存状況を踏まえた整理にすることにしたものの、中西氏が先に調査された際に、御当主が自身で蔵から出された文書を中西氏が主要な文書を仮整理されていたために、その方針を完全に実施できないものの、できるだけ現存状態を尊重するようにした。近代文書の整理法については近代の経済史研究者と公文書館の人との間で理解がかなり違うようであるが、今回の整理ではなるべく後者の方針も尊重するようにはした。その整理のあり方については、凡例に記したのでそれを参照されたい。なお、個人情報に関わる資料類については、当然ながら配慮をして目録をまとめている。

こうして整理された文書は、明治21年の絵図、文書は同34年を初めとして総数約1万点となった。伏木地区に残されている近代関係の文書類では、このような多数の文書は他にはない。年代的には明治30年代以降のものとなるが、明治のものはほとんどなく、大正以降の文書からなる。

文書の内容については丁寧に記すことはできないので、その持つ特徴を以下に紹介することにした。

第1の特徴は、棚田家文書にはその家業に関する、とりわけ北海木材・北海商行の関係

文書が数多く残されている点である。樺太からの材木移入など、日本海地域の流通経済面、そしてまた企業経営を知る上で貴重な文書という点である。

第2にはその家業にも関わる瓦焼き工場経営史料などもあり、伏木地域の重要な産業を知る点でも大切な文書である。

第3には棚田家が居住した町内関係の文書、中でも貴重な町内会文書が多数残された点である。この町内会は政府が地域の人々を戦争に協力させるために組織したもので、現在のところ富山県内でこのような多数の町内会文書は発見されていない。この史料により戦時中の人々の暮らしがよくわかることになる。

第4には、葉書の類が多数残されていた点もその特徴としてあげられよう。

このように棚田家文書は伏木地区に残された貴重な近代文書である。緊急整理のために資料分析をする時間がないために、丁寧な解説はこの目録から省かせていただいた。また。印刷の関係で校正が1回しか許されなかったので、行き届いていない点が残された。今後は目録の本格的な出版物としての発行も必要であり、この折りに補訂しなければいけない点が残っている。緊急整理のために完成された目録となっていないとはいえ、本文書が地域の貴重な近代の歴史資料として大事に保存されるとともに、様々な形で利用され、また同家の建物と共に貴重な文化財として歴史都市高岡の伏木地区の観光面でも有効に活用されればと考える。